〔第20号記念特集〕

1985年に創刊されて以来20年余り、みなさまの叱咤激励に支えられ、『研究報告』は20号を迎えることとなりました。この節目を記念して、我々は先輩諸氏にご協力を仰ぎ、記念特集を組みました。松村先生、片岡先生、廣川先生の御三方には往時を振りかえるエッセイを寄稿していただき、大川先生と奥田先生にはインタビューで『研究報告』に寄せる想いを語っていただきました。

『研究報告』の誕生
― 大川勇先生・奥田敏広先生に聞く ―

2006年9月21日
於　大川研究室

インタビュー&編集　樋口 梨々子
記録　井上 遊

―― 本日はお忙しい中、インタビューにご協力いただき本当にありがとうございます。早速ですが、先生方は『研究報告』創刊時のメンバーでいらっしゃいましたね。そもそも『研究報告』はどのようなプロセスで創刊されたのでしょうか？　学生の間から自発的に、もしくは当時の先生方に促されて出来たものなのでしょうか？

大川先生（以下、敬称略）　私は正直なところ全然覚えてなかったんですけど、奥田さんとこの前話してたら、奥田さんの方がちゃんと覚えていてくれて・・・

奥田先生（以下、敬称略）　うん、まあその両方と言えますよね。今に比べて大学院生が中心になって雑誌を発行するということは今よりずっと少なかったのですが、山口先生から「東大には『詩・言語』というのがあるよ」と聞きましてね。でも、それで先生が僕たちに何かをするように強制したというわけではなくて、その前から既に学生たちの間にも自分たちで執筆の場を確保しようという意識があったようでした。「何かをした方が良いのでは」という両方の思いが重なったというところですね。さらに、修士課程修了後すぐに就職先が決まらなくなってしまった状況もあって、博士課程に人がたまりだしたのが、ちょうど僕がドクターに入る3年ほど前からかな。そこで当時の主任教授であった平井先生も「就職対策として印刷された論文があった方が有利だよ」とおっしゃったように記憶しますね。

大川　それは平井先生が直接おっしゃったの？

奥田　いいや、間接的に山口先生から聞いたよ。平井先生が直接学生に何かを言うということは非常に少なかったから。いずれにしても、先生方が具体的にこうしなさい、ということはほとんどなかったから、最終的には学生の意思ということになりますね。

大川　じゃあ、創刊の時には誰かが中心になって音頭取りとかしたのかな？

奥田　いや、そんなこともなかったんじゃ・・・というか、大川だって創刊時に一緒にいたじゃないか（笑）

大川　いやぁ、僕は本当に全然覚えてなくって（笑）

――　つまり『研究報告』は皆さんのいろいろな想いから時間をかけて創刊へとこぎつけ、そのモデル的存在は『詩・言語』だったと言えるわけですね？

奥田　ええ、そうですね。ただ、僕はよく知らないんだけど『詩・言語』には学術論文だけではなくって・・・

大川　創作なども含まれた同人誌という感じでしたね。ですから『研究報告』はこれとは一味ちがう、距離を置いたもの、というスタンスを目指したのではなかったかな。

奥田　ただ、京大の学風からして、あまりにも「業績作り」にとらわれたアカデミックなものは避けたいという想いが、先生方やわれわれ院生の中にはあったんじゃない？

大川　そんなのあったかな？　僕は逆に『研究報告』は『詩・言語』とは一線を画した学術論文、直球勝負という意識だったなぁ。

奥田　だけど、もし先生方がアカデミックなものを望まれていたのであれば、もっと僕らに対して指導したと思わない？

大川　いいや、そのへんは「京大風」ですよ（笑）、学生の自主性を大事にするということでね。

――　ということは、執筆に対して先生方があまり口を挟まないというスタイルは、創刊時からのものなのですね？

大川　そうなりますね。だから、先生方は創刊されたものを見て少し驚かれていたという記憶がありますよ。

奥田　えっ、本当に？　例えば？

大川　正確な記憶はないんだけど、山口先生だったかな、出来上がったものを見て「意外と硬派だね」とおっしゃったと思う。もうちょっとエッセイ的なもの、文学青年的なもの（笑）も入ってくるかな、と思っていらっしゃったみたいで。

奥田　じゃ、山口先生なんかはもうちょっと同人誌風なものを想定されていたのかもしれないね。

大川　そしたら予想に反してゴリゴリのものが出てきて、あたかも論文であるかのようなものをポンポンとみんなが書いてしまった・・・(笑)

奥田　全くそうやね。

――　ところで掲載前の原稿はどのようにチェックされていたのですか？　かなり激しい意見交換や議論もされたのでしょうか？

大川・奥田　いや、それほどでもなかった。

奥田　そういえば、印刷前には山口先生もチェックに入って下さいましたよね。

大川　そうだったね。それから仲間うちでは、誤字・脱字なんかも細かくチェックして、意味不明の変な文章があったら「これ何？」という指摘とか。

――　それでは話は変わりますが、『研究報告』という名前は一体どなたが付けられたのでしょうか？

奥田　（笑）そうそう、この前もその話をしていて・・・まあ雑誌名というのはいわば看板だからねぇ。いずれにしても主任教授の平井先生はノータッチだったっけ？　あれ、どうだったかな。僕たちから候補を持っていったのか、先生方からいくつか呈示されたのかな？

大川　うーん・・・。ただ、「同人誌風な名前はやめといて」みたいなことは言われたよなぁ。

奥田　そうだな、僕の受け取った感じだと、同人誌に限ったものではなく、とにかく「凝った」名前はやめといて、というような・・・

大川　ああ、そうそう（笑）

奥田　非常にシンプルで謙虚なものにしろ、っていう（笑）

大川　そうだったそうだった（笑）、だから「凝って」「かっこつけた」ものは避けなさいって。

――　なるほど・・・つまり学生が作るものなのだから、どちらかと言えば平凡で単純な名前で、ということですよね。

大川・奥田　そうです。

大川　そう言えば、内容的なことに平井先生は全くノータッチだったんだけど、雑誌名に関しては山口先生ではなく平井先生が何かおっしゃっていたような気もする。

奥田　最終的には平井先生の「例えば『研究報告』とかどう？」というツルの一声で決定したんじゃない？

大川　えっ、そうだった？　いや、そうじゃないだろう・・・でも結局のところ『研究報告』という名前そのものは、どこから出てきたのだったのかな。

奥田　そのあたり曖昧だなぁ。

大川　ちゃんと覚えてないけど、僕たちで話し合った記憶もあるんだよね・・・ただね、僕の記憶だと、僕ら学生で出し合った案も結局のところ、最初から凝ったものにはならなかったと思うんだよ。だからどっちにしても、かっこつけた標題をつけようという気持ちは僕らにも全然なかったんじゃない？

奥田　それは僕個人としてもそのように記憶しているよ。

――　それでは次に金銭的なことについてお伺いしても構いませんか？　ちょっと質問するのも憚られるのですが・・・

大川・奥田　いやいや、それは一番重要なことですよ（笑）

大川　本当に最大の問題でね、これに関しては釘を刺されたのを覚えてるよ。

奥田　あっ、そうやった？

大川　うん、はっきり記憶しているんだ。ほとんど口出しされない平井先生が「これだけは言わせてくれ」って。「出来上がったものを勝手に送りつけて、寄付を要求するようなことはやめてくれ。君たちは学生なのだから『読んでいただく』という姿勢を忘れないこと。絶対にこちらから寄付を要求するような文書は送りつけるな！」って。

――　それでは経済面では具体的にはどのようにやり繰りされたのですか？

大川　それが非常にありがたいことに、読んでくださった先輩諸氏や周囲の方の中に自発的に寄付の申し出をしてくださった方たちがいて。さらに平井先生や山口先生も・・・あれ、奥ゆかしい言い方で何と言うのかな、「君たち、これ、足しにしなさい」という感じで協力してくださったんですよ。

奥田　あー、うんうん。

大川　あと、当時の教養部の先生方も「君たちいったいどうやってやり繰りしているんだ？」と心配してくださったりもしてね。で、その中から何人かの先生方がやっぱり寄付をしてくださったよね。

奥田　そうだそうだ。ただね、大川がさっき言ったように、やはり寄付に頼るのは良くないという意識がみんなの中にあったから、寄付のお申し出をいただいた時でも本当にお心だけ、という感じで、あまり多くはいただかなかったんじゃなかったかな。

大川　だからこういう方たちの助けをもとにして・・・

奥田　あとは自己負担ってことやね。それは今と同じだと思うけど、会費を納めてあとは掲載するページ数に比例して支払い、さらに足りない分もみんなで割って負担したでしょ。

大川　そうかぁ、ということは結構払ってたってことだよね。

奥田　うん、5 万から 10 万の間くらいじゃない？

――　えっ！かなりな額ですよね？

大川　そんなに払ってた？　今なら書くのやめてるな（笑）

――　それだけ支払わないといけなかったのであれば、まさか執筆は義務ではなかったですよね。

大川　違います。執筆は希望者だけ。でも会員になるのは義務だったかな。

――　印刷はもちろん印刷所へ頼んでいたのですよね？

奥田　そうです。だけど、当時の印刷代ってずいぶん高かったんじゃないかなぁ。最近はバブルの後のデフレでかなり安価になっているみたいだけど。

大川　当時の会計記録なんかはもう残っていない？

――　一度探してみます。それでは少し漠然とした質問になりますが、『研究報告』が先生方にもたらしたもの、成果とはいったい何だったのでしょう？

大川・奥田　うーん、そうだね・・・

大川　言ってみれば『研究報告』は我々のほとんどにとって、「初めてひとに読んでいただくもの」ですよね。修士論文というのは、あくまで先生方だけが読まれるものでしょ？そうではなく

て公の目にも触れるのだから、「どうなることやら」という不安が最初は大きかったですね。で、さらに裏の話でいくと、これも冗談まじりで山口先生がおっしゃったことなんだけど。これまで京大の院生は「眠れる獅子」と思われていたけれども・・・

奥田 あー、そう、うんうん。

大川 君たちが雑誌を出すことによって、京大の正体が果たして本当に「眠れる獅子」なのか、それとも「眠ったままのネコ」なのか、ということが明らかになるよってね（全員笑）。だけど、いざ出してみると結構好評だったんだよね。

奥田 うーん、ただね、僕の印象ではやっぱり外部の人たちはおざなりにしか読んでいない、という感じだったなぁ。おざなりの褒め言葉、っていうのかな。ただ院生同士の間では、仲間うちでお互いに批評しあうとても良いきっかけになりました。そんなことはそれまでなかったから。

大川 僕の場合はね、個人的なことになるけど、大先輩にあたる方から平井先生にわざわざ手紙が来て、「大川論文に感銘を受けた」と言っていただいたんですよ。駆け出しの僕に対して、雲の上の先生がわざわざお言葉をかけてくださったことにすごく感激しました。これは次の論文を書く大きな力添えになりましたね。

奥田 へぇ、そうかぁ。残念ながら僕にはそんなことなかったなぁ・・・だけど、いずれにしても褒めてもらうというのはありがたいことでね。ほんと、褒めてもらうと伸びるよね。

大川 何と言っても「創刊号」に執筆したというのは特殊な状況で、だからこそ皆さんがきちんと読んでくださったという感があるんですよ。

奥田 本当にそうだと思うよ。これは創刊号の役得やったよね。

―― 先生方は今では逆の立場になられたわけですが、大川先生と奥田先生が最近の『研究報告』をご覧になって気づいたことなどは何かありますか？

奥田 最近はどうも文学と別の芸術を併せて論じる傾向にあるよね。それはそれで良いと思うしテーマ設定とか切り口は面白いと思うんだけど、何と言うか、ちょっとおざなりな感じもしてしまうんだよね。もっと深めていってほしい、と言うか・・・

大川 そう、面白そうなものや奇を衒ったものにパッと飛びつくんじゃなくて、テクストときちんと向き合い、作家・詩人とゆっくり対話しながら、時間をかけて自分の読みを重層化していくという姿勢が、とくに若いときには必要だと思うんだけど、いまはどうしても「数で勝負」みたいな感じになってしまうんだよね。そういう意味では『研究報告』も露骨に「業績作り」や博士論

文のパーツを作るという色合いが濃くなってきているのかもしれないね。

奥田　でもこれって、こういう状況を作ってしまった（我々を含めて）現在大学に勤めている側に元凶があるんだよね。点数による評価が横行してしまっている時代だから。

大川（うんうんと大きくうなずく）本当に基礎を作らないといけない時期に何かに追い立てられるように書かなきゃいけない、そんな風潮に流されてしまうっていうのは良くないね。僕らの頃はなんと言うかな、物書きとして自立するための修行をしている・・・そんな意識があって一球一球が真剣勝負だった気がする。「次ははたしていつ書けるんだろうか」という恐怖でいっぱいで。でも今の若い人たちはピースを書いているような感じでしょ？　時間のかけ方も含めて、そのあたりをいかに「あなたたち自身」が上手くやっていくかがポイントですよね。

奥田　いやぁ、本当にそうなんだけど、大川の場合はいささかカッコいい言い方し過ぎかな（笑）。でも確かに、コンスタントに書き続けることが必ずしも良いことかどうかもわからないし、一、二年は何も書くことの出来ない苦しみの時期というのがあったとしても、それが将来に役立つことになるかもしれない。例えば『研究報告』にもう少し研究ノート的なものがあっても良いかもしれないね、完成する論文以前の「何かやってるんだよ」という「もがき」が現れているようなものとか。

大川　まあ僕らの言っていることっていうのは、もう化石のようなものなのかもしれないけどね（全員笑）

奥田　でもこうして見てみると『研究報告』って20年もよく続いたよね。話しているとこちらも「隔世の感」というか。何しろもう20年も前のことだもんね・・・

これ以降も談話はまだまだ続き、気がつけば80分が経過。特に終盤は現在の文学研究をめぐって大変興味深いご意見をそれぞれが披露してくださいました。ただし、今回の趣旨である『研究報告』をめぐる話題からは若干内容が逸れるため、残念ではありますが割愛させていただくことにしました。

最後になりましたが、ご協力いただきました大川先生、奥田先生には改めて御礼申し上げます。
また私個人の感想にはなりますが、現在も真摯な態度で研究に励んでおられる先生方のお姿に直接触れられたことは、たいへん貴重な経験となりました。

〔大川勇　京都大学大学院人間・環境学研究科助教授〕
〔奥田敏広　京都大学大学院人間・環境学研究科助教授〕